OHCS 排泄減少を説明するのに好都合である。

以上 PAS は外因性 hydrocortisone の排泄遅延を来す。之は肝における結合型形成遅延の結果と考えられる。PAS は *in vitro* で hydrocortisone の側鎖の代謝を抑制する。

〔質問・答弁〕

演題 3 に対する質問

片 桐　謙（塩野義研）

1) 実験動物に兎を使用されているが，反応の発現に個体差が強くないか。

2) 他の動物に於ける反応形式は如何。

同上答弁　中塚　正行（広大薬理）

1) 使用動物数は約 60 羽であり，個体差は一応無視出来る。

2) その点も興味深く考える。

演題 5 に対する質問

鈴木　成美（京府医大微生物）

検査時の末稍淋巴液の処置法について尋ねたい。

同上答弁　荒 井　英（大阪市大医）

末稍淋巴液はとくに遠沈濾過をしていない。濾紙に空間位で，じかに淋巴液（ポリエチレンチューブより滴下する）を飽和度に滲ませて実験に供した。

演題 8 に対する質問

1)　川俣　順一（阪大微研）

同様な抗菌スペクトルをもつ抗生物質を併用される理由を伺いたい。

2)　中沢　昭三（京都薬大微生物）

In vitro の併用効果に於て Strain による差異があるが，如何程の Strain を使用されたか。

同上答弁　前川喜代彦（大阪市大医外科）

1) 試験管内実験においては，ブドウ球菌には CTC，大腸菌には TC が最も有効であるが，これを動物実験において検討すると共に混合感染に対する TC 系抗生物質の単独，併用効果を検討したかつたからである。

2) ブドウ球菌，大腸菌は標準株として 1 株づつしか使用しておらない。

演題 9 に対する質問

中沢　昭三（京都薬大微生物）

私共は現在伝研寄生虫との共同研究により放線菌培養濾液による犬の蟯虫及び豚蛔虫に対する効果を検討中であるが，同僚の内田がやつた。*Streptomyces hachijoensis* group に属する（U-13）は強力に蛔虫角皮を消化する事，又この作用はカゼイン分解力と平行する事を認めておる。

同上答弁

我々は単に駆虫効果を問題として効果を判定したので，その点については観察していない。

演題 12 に対する質問

大山　昭夫（京都大微生物）

1) 培養時間について。

2) 完全，強度或いは中等度発育障害の基準について。

3) 発育障害による細胞学所見。

4) 大単核球の採取方法並びに大単核球の含まれる%。

同上答弁　高 須　淳（阪歯大口腔外科）

1) 被覆硝子法については，72 時間培養を行い，24 時間毎に計測し，比較成長価を求めた。Carrel 瓶法については 7 日間培養を行つた。

2) 組織の発育帯が全くみられないものを完全発育障害，比較成長価 ～5.0 を強度発育障害，大略 5.0～10.0 を中等度発育障害としてわけてみた。

3) 発育障害による細胞の形態学的な変化については現在検討中であるから，後日報告したい。

4) 大単核球を単独にとり出すことは出来ないので，血液遠心分離後にできた白血球組織片を培養して大単核球をえた。培養後半になると殆んどが大単核球となる。

演題 13 に対する質問，追加

1)　柳 原　栄（大阪学芸大学衛生）

1) 大変面白い問題と思うが，凝集素は動員されるのか産生促進であるか。

2) われわれもこの種の研究を実施し，殊に抗体産生には Neural regulation が関与していることを経験しておる。この点御参考になれば。

2)　鈴木　成美（京都府大微生物）

抗腫瘍性物質の中でも Nitromin などでは抗体産生を抑制し且感染を促進するのが見られるのでこれらのものについても比較検討して戴きたい。

3)　沢田　秀作（阪大微研外科）

吾々は網内系機能に親和性，作用選択性を有するアクチノマイシンを用いて抗体産生に及ぼす影響を見たが，演者とは逆に抗体産生低下を認めた。又 γ-グロブリンも低下を認めた。

（1） 実験動物は家兎のみか。

（2） 免疫開始の時期は。

4)　芝　茂（阪大微研）

Actinomycin 等抗腫瘍性抗生物質の抗体産生に及ぼす影響等は実験方法によつて差異が出来ると思う。特に投与方法，投与量等で成績が変つて来るのではないか。

5)　青河　寛次（京都府大産婦人科）

私どもの教室では，抗腫瘍性物質の生体代謝に及ぼす影響を，蛋白代謝，ホルモン代謝を中心として観察している。

ただ今の御発表の趣旨と，吾々の成績がどのような関係があるかを，直接，直ちにこれを認めることはできな

いけれども，将来の問題として，何らかの関連性が想定される。

同上答弁

中沢　昭三（京都薬大微生物・東大伝研5研）

1）（1）　産生促進或は抑制と思われる。

2）　今回は抗生物質としての抗腫瘍性物質に限つた。

3）（1）　そうである。

（2）　抗腫瘍性物質投与と同時に始めた。

4）　その通りで有り，現在この点に就て検討中である。

演題14に対する質問

1）　青河　寛次（京都府大産婦人科）

（1）　他の抗腫瘍性物質に較べて白血球減少を示す傾斜態度如何。

（2）　臨床上，腫瘍耐性を帯びたような印象はなかつたか。

2）　芝　茂（阪大微研外科）

Mitomycin 投与後試験切片はどの様な部分から，又何カ所位から取つたか。

3）　大久保　滉（関西医大）

Mitomycin 投与による白血球減少の程度は他の抗腫瘍性物質と比較して如何。

同上答弁　酒井　克治（大阪市大白羽外科）

1）（1）　1日1mg を投与した場合，約1週後より白血球は急激に減少してくるように思われた。勿論動脈内挿管投与法を行つたときはやや延長してあらわれて来る。このように相当時日が経過して白血球が減少してくるのは，MM の作用が遅延性であるためと解釈している。

（2）　唯今表示した臨床例（動脈内挿管例中症例3直腸癌）でその試験切片像から，耐性を獲得したのではないかと思われる例があつた。すなわち，一旦著明な変性像を示した腫瘍が MM 約 30 mg 投与後には術前と同じような組織像を示して来た。

2）　腫瘤周辺部の発育旺盛と思われる部分から採取した。

3）　いまだ症例が少いので確かなことは申せないが，MM 投与に伴う白血球減少症は比較的早期にあらわれて来るが，現今までに発表されている合成抗癌剤よりは白血球減少症の程度が軽いのではないかと思う。

今後更に検討する。

演題15に対する質問

榊原　栄一（大阪学芸大衛生）

1）　解糖作用を実験されたのは腫瘍細胞かどうかお尋ねする。

2）　鉄の意義についてどうお考えか。

同上追加　若木　重敏（協和醗酵）

Mitomycin X の化学的性質について追加した MX は我々が秦博士より送られた *S. caesptosus* という新菌株を培養中偶然に得た新らしいフラクションであり次の諸点に於て秦博士等の分離された AB とちがう。

（1）　N の含量，X は A 及び B よりも明らかに多い。

（2）　mp。AB が 200°C 以下の mp を示すのに対し，このものは 360°C に到るも明瞭な mp or decomposition point を示さない。

（3）　特有な紫外部吸収を有す。

（4）　A に比し熱に対して非常に安定である。このものは2重結合 Co 及び Amine 等の構造をもつものと推定される所の着色性，pH，変色性塩基性抗生物質である。なお，*Streptomyces caespitosus* の培養液中には A, BX のほかに合計 10 種近くの Fraction がある。尚我々は X のほかに Y.R と仮称する Fraction も分離している。この Mitomycin は其の後秦博士の提案により Mitomycin C ともよばれている。従つて Mitomycin X は Mitomycin C と同一物質である。

演題16に対する追加

大山　昭夫（京大微生物）

演者の報告した Cobaltous bis-histitidine chlate compound に Phenylthiourea を配位したもの，又榊原等が報告を続けてきた同じ 8-Azaguanin を配位した数種の抗腫瘍性物質については協同研究として，培養細胞を用いて発育或いは呼吸に及ぼす影響等 *in vitro* に於ける研究を重ね *in vivo* に於ける成績と同様興味ある知見を得たので追加する。

演題24に対する質問

窪田　一夫（国立大阪病院）

1）　感受性の年次的推移は如何。

2）　府下と市内分離株との差は如何。

3）　耐性菌の疫学的意義は特に重要だと思う。又その性状の遺伝については特に興味深いと思うから，追求を乞う。

同上答弁

中沢　昭三（東大伝研第5研・京都薬大微生物）

1）　昨年度の成績では府下分離株に耐性菌が多く市内の方は少くなつたが，本年ではこのような事はない。

2）　現在，復帰試験をしているが 10 代目では未だ colony は R 型で有る。

3）　今後栄養要求，菌体内毒素，抗原構造呼吸能，喰菌能 etc. について検討中である。

演題26に対する質問

大久保　滉（関西医大）

ロイコマイシンの気管内注入で刺戟の強かつたのは全